2024 年度

2/2　入学試験

国　語

注 意

1．試験開始の合図があるまで，この冊子の中を見てはいけません。
2．放送の指示にしたがって，問題冊子に受験番号･氏名を記入します。次に，解答用紙の指定された場所にＱＲコードシールをはり，受験番号・氏名を記入します。
3．試験時間は 45 分です。
4．問題は，1 ページから 18 ページまで印刷してあります。試験が始まったら最初に確認（かくにん）し，足りないページがあったら申し出てください。
5．答えはすべて解答用紙に記入してください。
6．試験が終わった後，問題冊子・解答用紙とも回収します。
7．記述問題では，指定された字数の 8 割以上は書いてください。ぬき出し問題では，指定された字数で答えてください。どちらの場合も，句読点やかぎかっこなどの記号も字数にふくまれます。

共立女子中学校

受　験　番　号	氏　　名
B	

1 次の1～8の――線をつけたカタカナを漢字で、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

1 完成がまだ先であることはヒを見るより明らかだ。

2 製品を改良して独自の価値をソウシュツしたい。

3 兵庫県明石市は、「シゴセンのまち」と言われる。

4 仏像がアンチされた殿堂（でんどう）に入る。

5 警察官としてのショクムをまっとうする。

6 ご子息のお名前は何ですか。

7 お寺の灯明が遠くに見えた。

8 彼（かれ）は知識は豊富だが、世事にうとい。

2 中学一年生の共子さん、立子さん、誠子さんは、「わが街 神保町めぐり」を企画し、チラシを作成しました。三人の会話と次のページのチラシを参考に、1～4の問いに答えなさい。

《会話文》

共子：チラシを作ってみたの。これを各クラスにはってもらいましょう。

立子：字が大きくてとても見やすい。いいね、これ。

誠子：でも、これでは情報が少ないと思う。

共子：やっぱりそう思う？ 私も少し不安なのよね。

立子：そうかな。集合時間に、解散時間、お昼ご飯のメニューに、費用まで書いてあるから、問題ないと思う。

誠子：肝心の締め切り日が書いてないでしょ。

共子：あら。本当。いけない。忘れていたわ。

立子：「［①］」なんだから、書かなくてもいいんじゃないかな。

誠子：サブタイトルは、「［②］」にしたんだったね。この方がやっぱりいいね。

共子：この前話し合ったものね。「お花見」を入れない方がシンプルでいいわ。

立子：これ、③写真やイラストは大丈夫？

共子：ええ。写真は、先生が撮影されたものをもらったの。

誠子：［④］を入れたら、より親切だと思うよ。

立子：確かに。どれくらい歩くか、なんとなく分かった方がよさそう。

共子：なるほど。少し直してみるわ。

1 ［①］にあてはまることばをチラシから探し、二字で書きぬきなさい。

2 ［②］にあてはまることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 古書の街、神保町を歩いて歴史を学ぶ
イ 古書店街で学び、桜の下でカレーを味わう
ウ 古書やレトロな喫茶店、美しい自然にふれる
エ 歴史を学び、桜をめで、友情を深める
オ 学習や散策をしながら、友だちを増やす

3 ――線③「写真やイラストは大丈夫？」とありますが、立子さんが心配しているのはどのようなことですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 写真やイラストが内容にふさわしいものかということ
イ 写真やイラストで興味を持つ人が限定されないかということ
ウ 写真やイラストが著作権に触れてしまわないかということ
エ 写真やイラストが印刷したときによく見えるかということ
オ 写真やイラストが少なく分かりづらいのではないかということ

4 ［④］にあてはまることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 「当日の服装」
イ 「古書店の名前」
ウ 「駅の写真」
エ 「大まかな地図」
オ 「持ち物」

わが街　神保町めぐり

～　②　～

2024年　3月19日(火)

先着 30名!!

希望者は、1年3組　一ツ橋共子まで

私たちが6年間通う街、神保町の古書店街を散策し、歴史や文化に触れましょう。

歩いて、見て、
学んで、楽しむ！

主な見学地

＊古書店街

＊レトロな喫茶店通り

＊桜の名所　千鳥ヶ淵（ちどりがふち）

お花見も！！

＊10:00 学校正面玄関（げんかん）前集合、13:00解散 の予定です。

＊昼食は、喫茶「すずらん」の特製カレーライス弁当です。

＊参加費用は、1人、1,000円です。

＊くわしくは、1年3組一ツ橋共子まで。

3 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

子供のころ、見えない鬼に向かって思いきり豆をぶつけた覚えがある、節分の夜のことである。先頭に父か兄が撒いたが、わたしも真似して撒いた。窓を開けて盛大に豆を撒く。最近でこそ恥ずかしがって子供でさえ大きな声を出さなくなったが、昔は、こぞとばかり声を張り上げたものだった。

埼玉県に鬼鎮神社というのがある。鬼は悪者で、それを鎮める神社ということだが、鬼だって、あんなに追われたら辛い。追われた鬼の心を鎮めてくれるところでもある。日本各地に鬼鎮めの神社があるというから鬼も救われるだろう。新宿歌舞伎町にも鬼王神社というのがあるらしい。鬼を春の神として招くのだということだ。これらの神社では節分の日に「鬼は外」とは言わず、「鬼は内」という。

あたたかく炒られて嬉し年の豆
門にさしてをがまるるなり　①
節分の豆を撒く夜に泊りたるふるさとびとのしたしかりけり

高濱虚子
小林一茶
古泉千樫『青牛集』

②節分の夜に故郷に帰り、懐かしさと暖かさを感じた古泉千樫。子供のころの習慣を思い出しながら家族との交わりを楽しんだのだろう。

③鬼というのは、いろいろな成立ちがある。もちろん悪者というのが主流なのだろうが、注1物の怪とか、見えないもの、しかも女性の心が作り出したものもある。仏教的な観点から注2羅刹のようなものもあり、異界のもの、人間界とは違うものという性質もある。あるいは異常な力を持ったものとか、ずば抜けたものを鬼とも言う。

日本は、調和をよしとする民族だから、異質なものは弾いていったということもあるのだろう。この世の不可解なものを「鬼」としていたのかもしれない。

「泣いた赤鬼」という童話もある。人間と友達になりたい赤鬼が、青鬼を（青鬼の提案で）悪者にすることで人間と親しくなる。けれど青鬼とはその後会うことはできなくなるという話だが、とてもやさしい赤鬼で、友達になってもいいかなと思う鬼である。

豆まきの日は、柊の枝に鰯の頭をさして門口に挿しておく。どうやら鬼は魚の匂いが嫌いらしい。柊の葉の棘が鬼の目を突くと

される。

昔は、今に比べて暗かった。まず電気がない。もちろん街灯もないし、家々の明かりもまったくない。そんな闇のなかで、不可思議なことが多かったから、鬼を払うということにも切実さがあった。

鬼には強いとか大きいという意味もある。鬼蜻蜓、注3鬼蘇鉄、注4鬼絞りなどは大きいとか粗いということである。

さて豆まきが終るとあすは立春。いよいよ春。豆まきが楽しいのも明日から春だという思いがあるからだ。

禅寺では「立春大吉」の札を門口に貼る。新年を祝う言葉だそうだ。つまり旧暦でいえばこのころが元日ということになる。たしかにこの頃から木の芽草の芽がちょっとずつ顔を出しはじめるので、新春にふさわしい気もする。旧暦のほうが日本の季節とあっているなあと思うのはこういうときである。

立春のかゞやき丘に注5あまねかり　　高濱年尾

さえざえと注6春立つらんかにごり酒ひとり酌みつつ注7息長にわれ　　坪野哲久『胡蝶夢』

④透きとほる花の幻影夜々に眠りをつつむ立春前後　　尾崎左永子『土曜日の歌集』

やはり春という声を聴くと、にごり酒など飲みたくもなり、花々の幻影なども身のめぐりに浮ぶ。

北国・雪国の人ばかりではなく、日本人にとって何となく［　⑤　］のが春なのである。

（沖　ななも『季節の楽章』本阿弥書店　による）

注1　物の怪　＝　人間を苦しめる霊・妖怪の類い
注2　羅刹　＝　もとは悪い鬼であったが、仏教的には守護神とされるもの
注3　鬼蘇鉄　＝　植物の名前
注4　鬼絞り　＝　着物の染めの名前
注5　あまねかり　＝　どこまでも広がっている
注6　春立つらんか　＝　春がやってきたのだろうか
注7　息長　＝　滋賀県北東部の地名

1 ［　①　］にあてはまることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　赤い鬼　　イ　赤鳥居　　ウ　赤いわし　　エ　赤小豆　　オ　赤節句

2 ――線②「節分の夜に故郷に帰り、懐かしさと暖かさを感じた」とありますが、「節分」についての説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　豆を撒き、鬼に見立てた邪気を払うことは、豊かな春を迎えるための儀式である。
イ　神社では鬼は神と見なされており、「鬼は外」ではなく「鬼は内」と言って豆を撒く。
ウ　街灯や明かりのない闇の中で見えない鬼に豆を当てるのは、この地方ならではの風習である。
エ　鬼は強くて大きいが、豆を撒くことの楽しさによって恐怖心はうすらいでいくものだ。
オ　温かく炒った豆を撒き、歳の数だけ拾って食べ、家族との絆を深めるための行事だ。

3 ――線③「鬼というのは、いろいろな成立ちがある。」とありますが、ここで「鬼」とされているものとして**ふさわしくないもの**を次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　他と比べものにならないくらい、はるかにすぐれたもの
イ　つながりを大切にしたい人間をやさしく受け入れるもの
ウ　ある特定の心が生み出した、目に見えない力のようなもの
エ　この世にあって、理解しようにも理解できないようなもの
オ　悪者とはかぎらず、人間界とは異なる論理を持つもの

4 ――線④「透きとほる花の幻影夜々に眠りをつつむ立春前後」とありますが、この説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　まだ肌寒いひんやりとした立春の空気に包まれていると、四季折々の花が一斉に花びらを閉じて眠ってしまったように感じられる。
イ　幾重にも筆を重ねて描いた水彩画の花は闇に咲く春の眠り草のようにうなだれ、人々の悲しみをじっと受けとめている。
ウ　立春の澄んだ空気に触れると、人は毎晩のように目を覚まし、夜にだけ咲いている幻のような花があるということに気づく。
エ　春がやって来ると思うと、うとうとしながら閉じた瞳の奥に、春のさかりに咲きほこる桜の花がほんのりと浮かんで見えるようだ。
オ　心が傷つけられた夜に涙をこらえて眠ろうとすると、目の中がちかちかとして、桜ふぶきの舞う幻想的な景色のように見える。

5 ［　⑤　］にあてはまることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　胸さわぐ　　イ　うすら寒い　　ウ　鬼笑う　　エ　ひややかな　　オ　心浮き立つ

4 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

公民館のトイレに閉じ籠る時間は芽衣にとっては必要な時間だった。築年数が浅く清潔な公民館のトイレは、数分間に一度入り口に立たなければ人の気配がないのをいいことに明かりが自動的に消えるので、ぱっと辺りが暗くなる度に肩を震わせなくてはならない煩わしさがともなう。三つあるうち一番奥の洋式トイレに閉じ籠り、芽衣は町内会議が早く終わることを祈りながら買ってもらったばかりの赤いベルトの腕時計を見つめている。歳を取ると時間が過ぎるのが早く感じるという話をテレビで見たのを思い出しながら、遅々として進まない時計の短針を凝視していたが、それにも飽きて天井を見上げ、そこに施された注1トラバーチン柄の無数にある微生物のような細くうねうねと曲がった線と歪な点それぞれにヘビとカエルの性格を付与して［①］の物語を展開してみたりする。つまり、暇を持て余しすぎて思考が鈍りだす。

多目的室にいる子供たちの発する声や複数人の足音が漏れ出て、トイレにまで響いて②追い討ちをかけてくるので、それらを意識から排除するべくしきりにトイレの水を流す。白い便器に流れ込む水を眺め続けると、だんだんと川を眺めている時と同じ安らぎに包まれる。流水音が鳴り響いている間は放心していられるが、また暫くすると辺りはしんと静まり返って笑い声と積み木を乱暴に倒し崩す耳障りな音が聞こえてくる。一人で閉じ籠っていることに冷えきった孤独を感じて心臓がきゅっと苦しくなるが、トイレから出て多目的室に身を置くと今以上に孤独を感じるのを芽衣は知っている。ただ注2茫漠とした時間が薄暗く冷たいトイレの中で消費されていくのを黙って耐え続けているほうが、六歳の芽衣にとっては幾分かましなことだった。

一見注3混沌に見える集団の中にも、③必ず混沌に見せかけるための秩序のようなものが存在している。とりわけ子供の集団というのは各々が自分勝手に動いているように見えても、それは無意識の底で調和の取れた自分勝手であり、そのルールについていけないと上手く息をすることが出来なくなる。

芽衣の父と母が引っ越し先の町内会に属するようになってから一年が経っていた。月に一回行われる会議のために、父と母は芽衣を連れて公民館へ行くようになった。そこには芽衣と同じように親に連れて来られた子供がたくさん集まっている。大人たちは会議室でゴミ出しのルールであるとか季節のお祭りの内容であるとかの大事な話し合いをしなくてはならないので、子供たちはフローリングの敷かれた多目的室に連れて行かれる。「みんなで仲良くしてね」と言われ、多目的室に置いてきぼりにされた五歳から十歳程度の大小様々の子供たちは、木箱に入ったカルタや独楽で遊んだり、鬼ごっこやままごとを始めたりする。そこには芽衣と同じクラスの子供もいるし、芽衣と違う小学校や保育園に通う子供もいる。大人から見ると子供

は子供で一括りにされるのでそのまとまりに④明確な境目はなく、勝手にみんなで仲良くできるだろうと思っている。

⑤初めて公民館に来た日、「芽衣ちゃんはお姉さん役ね」とあかりちゃんが言った。あかりちゃんは芽衣が小学校に入学してから初めてできた友達である。家も近いので、引っ越してから一番よく遊ぶ仲だった。芽衣はおままごとでお姉さん役を引き受けたのだが、弟役の知らない男の子が鬼ごっこをしていた子供に背中を蹴られてみるみるうちに泣き出し、お姉さんなんだから面倒をみなくてはいけないとあかりちゃんに言われた。芽衣は「いたいのいたいのとんでけ」と背中をさすったりしながら泣き止まない男の子に注4辟易し、人が泣いているのに全く興味を示さずにカルタをしている五人の集団や鬼ごっこを続ける六人組に苛立ちを覚え始めた。あかりちゃんはお母さん役なので夕食のコロッケを空中で作ることに夢中になっていたが、しばらくすると芽衣の知らない女の子にトランプに誘われて、かき集められた一家は呆気なく離散した。知らない男の子はいつの間にか泣き止み、何事もなかったかのように鬼ごっこのチームに加わっているし、芽衣は本人の意思とは関係なくカルタをするということになっていた。カルタは周囲を不快にさせないように配慮して取る枚数やタイミングを考慮する必要があるし、⑥芽衣にとっては考えることの多い遊びである。しばらくカルタをしていると、隣で輪になってババ抜きをしていたあかりちゃんがズルをしたとかで喧嘩が始まる声が聞こえてそれどころではなくなってきた。

「あかり、さっきおれのトランプ見てた」
「見てないよ」
「絶対見てた。おれ見たもん」
「絶対見てないって」
「じゃあなんでババ引かなかったんですかー」
「四枚あるんだからババ引かなくてもおかしくないし。本当に見てないんだし」
「もういい、やーめた。おれ、カルタやる」
そう言って男の子はトランプを投げ捨てて芽衣の隣に座ってカルタに参加してきた。プレイヤーが一人いなくなっただけでババ抜きは終了せざるを得なかった。

⑦
「いしのうえにもさんねん」
「はいっ」
「あかり、本当に見てないんだってばっ」
「おにいかなぼう」
「はいっ。あ、今どっちが先だった？じゃんけんする？」
「ねえ、本当に見てないんだもんっ。話聞けって」
あかりちゃんは怒って顔を赤くして男の子の肩をパンチしていた。何度もパンチしたけど男の子も顔を赤くしながら無視してカルタを続けていた。トットッと肩に拳がぶつかる音を聞きながら、あかりちゃんの声に悲痛さが滲み出てきたことに耐えられなくなり、芽衣はあかりちゃんに声をかけた。
「わたし疲れたからあかりちゃん、代わりにやって」
「え、いいの？」

「うん」

「……ありがとう」

役を与えられた途端にあかりちゃんの涙はひっこみ、先ほどまでの悔しさや恥ずかしさを忘れてカルタに集中した。芽衣はあかりちゃんの後ろからカルタを眺めていたが、外野から見ていると次第に読み手の声と鬼ごっこの足音、叫声が混ざり合って頭の中で反響しはじめた。水中にいるみたいに声の輪郭がぼやけて言葉が意味をなさなくなり、三角形の積み木がかこんと床を凹ませる音が鳴った瞬間に何かがパチンと頭の中で弾けて途端に気分が悪くなった。芽衣は多目的室を出てトイレに駆け込んで暫くじっとした。原因不明の腹痛があまり良くならないまま、少し落ち着いた頃にトイレから戻ると、さっきまでカルタをしていたグループはトランプで七並べをしていて、さっきまで鬼ごっこをしていたグループがカルタをしていて、さっきまで積み木で遊んでいたグループはおままごとを始めていた。芽衣はトイレに行く前までカルタをしていたからカルタを続ければいいのかもしれないが、鬼ごっこをしていたグループの中に知り合いはいないし、先ほどまでカルタをしていたグループは七並べをしていてそこに芽衣の居場所は無くなっていた。おままごとは既に一家が成立してしまっており、積み木を駆使して壮大なドラマを展開し始めていた。カルタの扱い方が乱雑で、七並べに並べられたカードの歪みが気になり、子供のおじいちゃんの演技が耳障りでその全てが芽衣の脳内を攻撃していた。この部屋の中で楽しく笑い続ける事にも疲れ果てて、退屈さと眠気から口角が一気に下がった。部屋の隅で三角座りをし、顔を膝に埋めると注5喧騒が耳に入り込んで、芽衣の頭の中をかき混ぜてだんだんと涙が滲んだ。

芽衣にはおままごとの世界に没頭することも、鬼ごっこで本気を出して走ることも、カルタやトランプに集中することもできなかった。多目的室の中は規則性のない子供がたくさん収容されていて、芽衣には考えることが多すぎて頭がパンクしそうになる。再びトイレに逃げ込むと、ひんやりとした床をスリッパ越しに感じながらしゃがみ込み、時折屈伸などをしながら会議が終わるのを待った。それがたとえ真冬であっても、暖房の入った多目的室にいるよりも冷たいトイレで丸まっているほうが楽だということに気付いてからは、時間を見計らって多目的室にいるのは最初の十分間程度になった。

十分経った頃にそっと多目的室を抜け出して、トイレの個室に入ると洋式の便座に座って一時間ほどうとうと居眠りをしたりする。会議が終わると、親たちがぞろぞろと会議室から出てきて子供を呼び出す声がする。その声が聞こえると、芽衣はトイレから何事もなかったかのように出てきて母の元へ駆け寄る。しばらく声を出していなかったため、通りの悪い喉を震わせて今日は注6神経衰弱をして楽しかったと嘘をつく。

みんなで仲良くなんてできるわけがない、と小学一年生の芽衣は思っている。子供には煩い子供とか静かな子供とか急に泣き出す子供とか急に笑い出す子供とか急に怒り出す子供とか、とにかくいろんな子供がいて、それらの子供一人一人に対して

芽衣は上手く対応ができない。むろん、子供は初めから他の子供一人一人に対して上手に折り合いを付けて生きている訳ではなく、そのままならなさを深刻に受け止めることもなく自分勝手に生きて、そのうち⑧鋭い凸凹の岩がぶつかり合って角が取れていくように成長するものである。

（村雲菜月「桃のもも色」『太宰治賞２０２２』筑摩書房による）

注１　トラバーチン柄　＝　大理石を思わせる不規則な模様
注２　茫漠　＝　ぼんやりとしてとりとめがないさま
注３　混沌　＝　秩序がなく、まとまっていない状態
注４　辟易　＝　うんざりすること
注５　喧騒　＝　さわがしいさま
注６　神経衰弱　＝　トランプの遊び方の一つ

１　［　①　］に入ることばとしてもっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　一石二鳥
イ　十人十色
ウ　品行方正
エ　温故知新
オ　弱肉強食

２　――線②「追い討ちをかけてくる」とありますが、どういうことですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　芽衣の気分をより重くさせていくということ
イ　芽衣の集中力をさらに高めるということ
ウ　芽衣の怒りを一層激しくするということ
エ　他の子供たちの感情を強く伝えるということ
オ　他の子供たちの心を遠ざけてくれるということ

3　――線③「必ず混沌に見せかけるための秩序のようなものが存在している」とありますが、どういうことですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　子供たちは無作法にふるまいながらも、どこまで好き勝手できるか、常に大人の反応を探りながら過ごしているということ
イ　子供たちは無邪気にふるまうことで、大人が自分を確実に守ってくれるということを知りつつ行動しているということ
ウ　子供たちは自由気ままにふるまっているように見えながら、それぞれが相手のことを思いやって慎重に考え遊んでいるということ
エ　子供たちは深く考えずに行動しているように見えるが、その多くは自分の利益を一番に考えて行動しているということ
オ　子供たちはそれぞれ思い思いに過ごしているように見せつつも、実はふさわしい立場におさまっているということ

4　――線④「明確な境目はなく」とありますが、どういうことですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　子供たち一人一人の個性を見ないということ
イ　子供たちの興味関心を気に留めないということ
ウ　子供たちの背後にある事情を気にかけないということ
エ　子供たちの社交性がどれくらいかを気にしないということ
オ　子供と大人とを同じようにとらえているということ

5　――線⑤「初めて公民館に来た日」とありますが、この日は「芽衣」にとってどのような日になったと考えられますか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　大切な友人と再会できたものの、簡単に裏切られた忘れられない日
イ　居心地の悪さを感じつつ、なんとか逃げ道を見つけることができた日
ウ　上手に自分を主張できないことに嫌気がさし、からにこもってしまった日
エ　友人の気持ちを理解し手助けしたことで、人との関わり方を発見できた日
オ　多くの子供たちと接したことで、集団への苦手意識がうすらいでいった日

6　――線⑥「芽衣にとっては考えることの多い遊びである」とありますが、どういうことですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　カルタ取りが得意な芽衣にとっては、ただの遊びであってもいろいろと気をつかうことが多いということ
イ　友達と呼べる子供がいない中で遊ぶことは、人見知りの芽衣にとっては苦痛であるということ
ウ　活発な芽衣にとって、あまり動くことができないカルタ取りはつまらないゲームであるということ
エ　ルールが単純な遊びであるだけに、芽衣は勝敗以外のことに気をまわしすぎてしまうということ
オ　誠実でやさしい子供である芽衣は、いっしょに遊ぶ相手を気づかわずにはいられないということ

7　会話文⑦［　　］の様子を説明した文としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　好きなカルタ遊びに集中しようとする男の子と、腹いせにそれを妨害（ぼうがい）しようとするあかりの様子
イ　いっこうに話を聞こうとしない男の子と、それに対してだんだんと感情が高ぶっていくあかりの様子
ウ　あかりに対して少し引け目を感じている男の子と、自分の正しさを確信しているあかりの様子
エ　あかりの不正をどうしても許せず怒っている男の子と、なんとか許してもらおうと必死なあかりの様子
オ　いじわるをしている男の子と、それを感じながらどうしていいか分からず不安なあかりの様子

8　――線⑧「鋭い凸凹の岩がぶつかり合って角が取れていくように成長する」とありますが、具体的にはどういうことですか。次の（　）にあてはまるかたちにして五十字以内で説明しなさい。

（　五十字以内　）こと

（下書き用）

こと						
		40				

5 **次の文章を読み、後の問いに答えなさい。**

古屋晋一さんは、体の動きに注目してピアニストの演奏技術を助ける方法を研究している科学者です。今でも忘れられないのは、注1Ｚｏｏｍを使った予備インタビューで笑いながら言い放ったこのひとこと。「練習と本番は、仮説と検証の関係なんです」。さすが科学者はピアノの見方も理系だなあ、と一瞬たじろいでしまいました。

しかし①古屋さんは、実はピアノに関しては当事者でもあります。幼いころからピアニストを目指して、本格的な練習を積んでいたのです。

大学生のころは、授業が終わるや否や誰よりも早く講義室を抜け、自宅で練習するために急行電車に飛び乗っていたといいます。大学が休みの日の練習は、一日に一二時間。結局は科学者の道に進みましたが、今でも古屋さんのまわりには現役のピアニストやピアニストの卵がたくさんいて、こうした当事者とともに、そして当事者として、研究を進めています。

そんな古屋さんにとって、ピアノを演奏するとはどういうことなのか。彼が語った「人生最高の演奏経験」は、一般的なピアノ演奏のイメージからも、科学者のイメージからも、ずいぶんとかけ離れたものでした。

> ぼくは、あるコンクールの本選で会場を間違えたことがあるんですよ。ある大学のホールが会場だったんですが、その大学にはホールが二つあったんです。徒歩一五分くらい離れていて。何も知らずに行ったら「こっちじゃないよ」って言われて。それで慌てて全速力で走って、「せっかく注2ファイナルまで行けたのに」って必死でした。ぜーぜー言いながら、でも間に合って、登録が終わってから三〇分か四〇分くらい落ち着く時間がありました。トイレでもしばらくハーハーしてたんですが、そのときのパフォーマンスが、ぼくの人生のベストパフォーマンスなんです。

何と、遅刻しかけて全力疾走したあとの演奏が、人生最高の演奏だったと言うのです。ピアニストはある意味でアスリートのようなところがありますから、コンクールの本番となれば、数日前、数週間前から体の注3コンディションを万全に整えて準備します。古屋さんも、この日に向けて体調に配慮し、無理をしないようにしてきたはずです。ところが、場所の思い違いのために、その調整がすべてくるってしまった。しかしそこに、思いがけず最高の演奏がやってきたのです。

こうすればうまくいく、という自分なりの［　②　］の外側に、むしろ重要な可能性が転がっている。機械のようにすべてを精密にコントロールする注4エンジニアリングのイメージとはだいぶ違うこの感覚こそ、実は古屋さんがピアノを弾く体について語るときに、さまざまなレベルで注5変奏されながら繰り返し出てくる注6モチーフです。

もちろん、思い通りにいかないと分かって、かえって力が抜けた、という面もあるでしょう。単に力みがなくなったから、うまく弾けたのだと。

でも単に緊張の問題だったら、演奏前にリラックスすればいいだけです。それは「方程式の外」ではありません。最高のパフォーマンスに喜びつつ、古屋さんは反省もしていました。「コンディショニングを間違っていたのかな」。

練習において、自分の可能性を十分に探索できていなかったのではないか。古屋さんの研究が始まります。

そもそも、そのときの演奏とは、具体的にはどのような演奏だったのでしょうか。こうすればうまくいく、という方程式の外側にある演奏とはどのようなものだったのか。

素人的な表現をすれば、それは③「ピアノにちゃんと出会えた」演奏でした。あるいは「ピアノおよびそれをとりまく環境にちゃんと出会えた」。つまり、最初に想定していた「自分はこう弾きたい」というイメージをただ遂行するのではなくて、コンクールが行われた具体的な環境の中に、自分の演奏を着地させることができた。サッカーで言うなら「敵や芝がよく見えていた」ということになるでしょうか。

たとえばピアノも場所によって違うじゃないですか。それからホールの音響もふだんの家とは違います。つまり、本番では「こう打鍵するとこういう音がするはずだ」という関係がくずれているんです。それをまずつかまないといけません。つかむと「こうやったらこの音が出るんだ、じゃあこうしてみよう」と操作できるようになります。それが入っている状態、ノっている状態です。

どんな技能も具体的な環境の中で発揮されるものです。「うまい」と「うまくいく」は違う。「うまくいく」ためには、個人の身体能力の高さとしての「うまい」だけでなく、環境の［④A］な条件と交渉しながら［④B］にパフォーマンスを組み立てていく適応力が重要です。

楽器には、当然ながら個体差があります。加えて、置かれた場所によって、あるいはその日の気温や湿度によっても、音の響き方が違うでしょう。そもそも家のピアノだとせいぜい三〇〇万円ですが、コンサートホールだと一五〇〇万円くらいのピアノが置いてあることもあります。そうすると、ふだん出ないような小さな音まで出たりする。扱う相手が変わることによって、「こう打鍵するとこういう音がするはずだ」という自分なりの方程式がおのずとくずれていきます。

くずれたときに、それまでの自分の方程式に固執せず、ピアノの注7ポテンシャルを引き出すような形で、予定していた演奏を変形できること。あらたな方程式をその場で、鍵盤に触りながら、構築できること。これが「最高の演奏」であり「うまくいく」

ための鍵です。

古屋さんは、環境に適応できているときの感覚を「演奏に入る」と表現しています。「ぼくの場合は、入る、ノってくるまでに時間がかかってしまうタイプなんですけど、そのとき〔遅刻しそうになったコンクールのとき〕は弾いてすぐすっと入れたんです」。興味深いのは、どこか能動性では語りきれないような側面、「⑤自分の能力との非能動的な出会い」とでもいうべき感覚があるということです。入ろう入ろうとするまでもなく、気づいたらもう「入って」いた。入ってしまえば、想定されていた方程式との誤差はもはや消すべきノイズにならず、演奏を前へ前へと進めてくれる推進力になるでしょう。

ピアノは必ずしも本番のほうがよいものであるとは限りません。あるとき、古屋さんは、学会のオープニングで、友人のプロのピアニストに弾いてもらうことにしました。けれども、そこにあったのが、あまりよくないピアノだった。小さい音があまり鳴らなかったそうです。困ったなと思っていたら、そのピアニストの方は、想定していた小さい音が出ない分、大きい音のほうを一・二倍くらい拡大して、同じ注8レンジを確保したそうです。その場の条件にあわせて、即興で曲を再構築したのです。

古屋さんは音大で働いていたときに、いろいろな人に話を聞いてまわりました。「本番の面白さってどこにあるんですか」。すると「ふだん降りてこない演奏が降りてくることだ」という答えが返ってきた。ふだんと違うから怖くないんですか、と返すと、「それはいつも同じ演奏ばかりしてるからだ」と言われたそうです。「トップの方は、ふだんからそうした探索をしてるのかなと思います」。

「こうすればうまくいく」という自分なりの方程式の外側に転がっている可能性。確かにそれは、偶然「降りてくる」注9恩寵のようなものであって、先回りで計算してつかめるようなものではないでしょう。つかまえようと意図したとたん、それは新たな「方程式の外部」を生み出すことにしかならない。

けれども、同時に考えなければならないのは、［　⑥　］、ということです。「次はうまくいくといいなあ」という注10博打みたいな姿勢では、すばらしい演奏を生み出すことはできない。

そこで重要なのが「探索」です。たとえばふだんと違う練習室で練習をしてみる。いつもと違う時間帯にピアノを弾いてみる。指の使い方のこまやかな違いにも探索はありえるでしょう。そうすることによって、「こうすればうまくいく」の外に対する感度を高めることができる。

冒頭に引用したとおり、古屋さんにとって、⑦「練習と本番は仮説と検証の関係」にあります。いかにたくさんの仮説を立てることができるか。言いかえれば、いかに自分で自分をゆさぶることができるか。その探索の幅と質が、本番のパフォーマンスを左右します。思ってもみなかったところに出てしまえる能力が、ピアノの演奏技能にとって重要だということになります。

（伊藤亜紗『体はゆく　できるを科学する〈テクノロジー×身体〉』文藝春秋　による）

注1　Zoom　＝　オンライン会議用のアプリケーション
注2　ファイナル　＝　コンクールの本選のこと
注3　コンディション　＝　状態
注4　エンジニアリング　＝　工学のこと
注5　変奏　＝　形を変えて表現すること
注6　モチーフ　＝　題材
注7　ポテンシャル　＝　そのものが持っている可能性
注8　レンジ　＝　幅
注9　恩寵　＝　あたえられためぐみ
注10　博打　＝　かけごと

1　――線①「古屋さんは、実はピアノに関しては当事者でもあります」とありますが、「当事者」とはどのような意味で使われていますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　ピアノの技能を磨くことよりも、ピアノの研究にのめりこんできた人であるということ
イ　第一線でピアノをたしなみ、常にピアノをかたわらにして過ごしてきた人であるということ
ウ　日夜ピアノの練習にのめりこんできたものの、挫折して道半ばで転身した人であるということ
エ　ピアノ以外のことは何も考えられず、いつでもピアノを最優先にしてしまう人であるということ
オ　ピアノの世界には一定の距離をおきながら、冷静に見つめることのできる人であるということ

2　［②］に入ることばを、文章中から**三字**で探し、書きぬきなさい。

3　――線③「『ピアノにちゃんと出会えた』演奏」とありますが、それはどのようなものですか。その説明としてふさわしいものを次から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　練習でもなかなか出せないようなパフォーマンスを本番でしっかりと発揮できた演奏
イ　思ってもみなかったようなすばらしい結果をたまたま発揮できた演奏
ウ　思い描いていた通りの演奏を本番でもしっかりと再現できた演奏
エ　ピアノの方からも歩みよってくれたように感じられる、心が洗われるような演奏
オ　予定していたものにこだわらず、その場にふさわしいやり方を発見できた演奏

4 ［④A］・［④B］にあてはまることばの組み合わせとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　A実質的・B意識的
イ　A部分的・B奇跡的
ウ　A複合的・B攻撃的
エ　A具体的・B即興的
オ　A一方的・B規則的

5 ――線⑤「自分の能力との非能動的な出会い」とありますが、その例として**ふさわしくないもの**を次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　相手役の予想外の動きにつられて、これまでの稽古になかった動きを体得したこと
イ　初めてのマラソンコースを走りながら、新しい自分の走りが形作られていくこと
ウ　旅をしながら見つけた被写体にレンズを向けて、独自の表現スタイルが見出されていくこと
エ　冷蔵庫の中の消費期限が近いものを使って、ありあわせで上手においしい夕飯を作れたこと
オ　国際大会で初めて強豪チームと対戦する中で、秘めた実力が引き出されていくこと

6 ［⑥］にあてはまることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　雨だれ石をも穿つ
イ　あいた口はふさがらない
ウ　偶然は偶然には起きない
エ　人生に失敗はつきものである
オ　三味線は弾かねばならない

7　――線⑦「『練習と本番は仮説と検証の関係』にあります」とありますが、この古屋さんの考え方を、次の（　　）にあてはまるかたちにして説明しなさい。ただし、A・Bそれぞれ二十五字以内で書きなさい。

日頃から（ A　二十五字以内 ）ような練習をかさねることで、（ B　二十五字以内 ）力が身につき、本番でも良いパフォーマンスが発揮されるようになるということ。

（下書き用）

A	B
ような練習をかさねることで、	力が身につき、……

（問題はこれで終わりです）